

斗争詩集 『有刺鉄線』

- 第一部・有刺鉄線
- 第二部・斗いの歓声
- 第三部・組織防衛
- 第四部・斗いの記録

敵のバリケードは弱い

信夫 澄子

すでに三月月の長い斗い、その一日一日のはげしい斗いの連続のなかから、勝利をかちとる意志のもとに生れでた斗争詩集に心から声援をおくります。

おもえば、ノーワーク・ノーペイのごとくくないやがらせ、ロックアウトの非人間的行為、暴力をふるう権力、その憎々しいふるまいに對し、怒りと斗いの意志のたかまるのは日産労働者の要求に十分の狂いのない正しさがあるからこそ。その正しい要求の勝利を念じているのは、日本の労働者、全市民です。

いま、あなたたちと對峙して立つ、ロックアウトのバリケード。そのバリケードは金のかで動員してつくられたもので、弱いバリケードです。そのことを次の歌が証明しています。

悲しき作業

(註) 八月五日未明、行先も仕事の内容も告げられず、ただ緊急作業だ、金を出さから是非たのむといわれ、かり出され連れて行かれた処はスト中の日産工場、会社側のロックアウトのためのバリケード作りであった。

何のため 誰がため作るバリケード 思いめぐりて打ちあぐむ

バリケード作る作業は雨の中 拒否出来ぬ意気地なしの口がいたる雨の中

日産の仲間よ済まぬ 不田妻なき俺だ済まぬと杭を打ちつゝ

日産の仲間よストを勝ち抜けと念つていた身が今バリケード作る

会社側のためバリケード作る俺ぬげぬけとスト勝てと念つ資格があるか

意気地なき吾で吾が身を降りしきる雨に打たせて唇かみていし

意気地なき吾で吾が手につききして有刺鉄線また束の末

束の末も有刺鉄線はそのまゝ運河に投げ込みたき衝動にからる

暗闇に一人佇みあるときに憶かならぬ言葉もききし

雨に濡れ立つ赤旗のある門え立入禁止の札打てとこいつ

プロレタリアート裏切る行為せし今は門の赤旗止視出来得ず

あなたたちの前に立ちほだかるバリケードは弱い。敵の弱いところをついて斗いぬいてください。この歌をつくったマシメな青年のいたみは生涯の悔いであるが、苦しみぬいている青年のおもいが、あなたたちの闘い方に転化するやうに。

この斗争詩集が、新しい武器となって、悪条件を斗いぬいてゆくとある。

勝利の日まで、団結のスクラムをゆるめなさいで斗ってください。

一九五三・八・

日産の労働者よ

愛する日産の労働者よ

あなたが困難な闘いを続けていることを
知っている

あなたが苦しむことも知っている
だが、決して負けるな

あなたが最後には勝利するのよ
私は知っている。

日産の労働者よ

今、結核の病床に寝こいようとも

私はあなたが腕をくぐらさうとも
負けてしまふものだ

治らないうちに追いたたけなすめる患者
あたたかい食事も食えなせてもらえない重症
者

これらの人たちが、ただ「すじに願っている
ものは何か、

労働者の勝利の日だ！

もし、日本の労働者に明日への確信が

ないとしたら

もし、あなたが固い団結の力を信じないとし
たら

私たちは何に頼つてこの苦しい困難と圧迫に
たえてゆくのか

愛する日産の労働者よ

たたかおう！

心から挨拶を送る。

国立療養所久里浜病院

片山 乙女

(二十五年生課勤務)

他 有志 一同

一九五三年八月十日

(註)

半病中の方たちから送られたこの激励の詩に
は、片山乙女さんの他に二十三名の署名が記
されてありました。

第一部

有刺鉄線

職場の歌

朝

宮 順一郎

「お早う」

「お早う」

「昨日はおつかれねえ。」

くたくたに疲れても、ひと晩寝た朝は

どしゃぶら晴々した顔だちよ

熱い茶をすすりますし

MSAのじよ

国会紛斗事件のじよ

朝鮮動乱の停戦のじよ

心中未遂のじよ

新聞記事の話から仕事の話へ。

仕事前の二服は一日の中一番たのしい時間だ

四角に区切られた空

汐っぱい微風

煙草のうまいのもこの時だ。

もつ工場ではスイッチが入ったよつだ。

さあ仕事だ、仕事だ。

仕事にかかつたら

給料のじよ

労働強化のじよ

戦争の不安

そんなことは、すっかり忘れよう。

ソロバンがやけになる

ペン先が紙面をひつかき廻す

計算機がガラガラ音立てる

機械に取りくも友らのまわす操縦が

わんわんと鳴つて

ぴいんと張つたきんちょうの朝が訪れた

あんな朝よ

再び訪ねよう誰に叫ぼう。

俺の職場では
浜質 知彦

俺の職場では
治具やプレス、鋳物、鍛造などの
型を作っている
千分の二だ、だと二公つ
こまかい仕事をやっている
その工場は
ベンチレーターもなく
天窓は閉ったままで
夏でもなればむし風呂の様になった
昼の休み時間か来ると
誰れでもくつたりとした
冬は冬で
屋内に雪が舞い込み
寒気はより下りもひどかった
カントキは毎日燻ぶり
煙は屋根に突きあたっては
スレート壁をかけ下りて来た
その中で
顔をしかめて測定器具の目盛をよんだ
モアル・チエンチだ
一部改造だ
その度に俺の職場は眼の廻る程 いそがしか
つた。
かついで
に「つた運河だけが慰めだった
皆が冬も夏も
油の浮いた運河を眺めて頑張った

俺たちの職場
春野 一郎

ニッサン車を組立て
ニッサン車を造り出す
俺たちの職場
チエンコンベアには
俺たちが汗して組立てたぐるまがある。
朝のサイレンと共にスイッチが入り
ラインが動き出す
わかものはスパナーを握り

ナットランナーにしがみついて生産が始る
俺たちの職場は
工場の心臓部だ

皆はたらいた
長谷 留治

そつだ
ハンマーを握り
機械を廻し
タイプライターのキイをたたき
ペンを持ち

溶鉄をつぎ

それぞれの職場で雑多な人間が働いたのだ
苦しい生活の中で

いち早くニッサン車、ダットサン車
少しでも優秀な国産車を造り出すために
七千の労働者が頑張つて来たのだ

希い

和加 太平

ひとなみのくらしを希い
わかものがひとりだけ出来るように
技能と経験にまつて
労働の質と量にこだわった賃金をと
それは

自家用車を買ひ、女中を雇ひ
豪壮な屋敷に住もつてまづのじやない
明日の生産に

切りつめた被服を纏ひ
ひとりひとりが笑顔で
つれいなく働ける為に

まじめに考え、みんなで決めた賃金
作り出す車を、一日でも多くとその車は
戦場を走る草色の車ではなく

砂利を運び、木材を積み
美しい日本を創る為に

田舎から漁村から
新しい魚や野菜を

いつときも速く安く送る為に
あの藍色のトラックの中から

あのバスのクリーム色の窓から
まごころに満ちた笑顔をこ
心から希うが故に

働く者の あたりまえの
さくやかな 平和な希いを
。

同志愛

融 資

鈴木勝

トヨタの兄弟

いすゞの兄弟だつて

どの兄弟だつて

みんな申し合せたまじつて
そのくくんだくじつの中から

ひとり千田の融資をこけてやぶつて

全員の旗の下に集つた

あたくかい同志愛だ。

あゝ今日も夏空に組合格ははためいてる

同志の寝顔

藤田 弘輝

秋より冷い雨

雲の音

無表情な証明

夜は

沈黙の対立

早越は階下階上

時計は三十分遅刻のまらに時を刻む

時折足音が夫上にひびく

青年たちは椅子を並べ

机の上で

上衣一枚ひつけて

寝ころぶ

かゝる寝顔

気がねする程大きなこぼれ

それだけが此の部屋に起つてゐる音の総てが

不安と誘惑を打ち振り、自信と信頼の羽翫を
憎しみて寝顔で下満ちた同志の寝顔

明日は明日で又何か問題が起る

時間は思慮と沈黙のうちに経過してゆく

軽い寝顔の若者が「閉鎖」をこぼやいて身体
をこぼして動がした

彼は寝ていても半つてゐる

そつた俺は今夜は寝ずして頑張る

俺は不死身だ

若者よ、くくすいねむれ

君たちには明日も仕事がある

君たちの中には

七十一時間勤務者もいる

今夜の勤務を進んで申し出たものもいる

早い青年部員、早い勤務の順にも黙々と

この役にゆく者はがら

暖い毛布はなく

椅子や机の布団ではなぞ痛がるつが

いざいざ時は

すぐ起ち上らねばならぬのだ

俺が一人起きている限り

絶対大丈夫だから

若者よ、くくすいねむれ

雨と

沈黙

眼に見えぬ対立の中に

夜は三十分遅れた一本の針が

無言の斗争を示す

去る 友よ (S子)

中里 くらみ子

S子よ

いゝえこんな他人行儀な呼び方はやめよう

私の一番仲のよかつたS子

小学校から中学校へ

それから高校へ入つて一緒に卒業した

私のS子
一緒に入社したS子
長い間私は貴女をS子と呼び
貴女は私をS子と呼んだ仲
それなのに
貴女はいま
私との友情をたち切り
私たちの組織からはなれてゆく

なせなの S子
斗いがはげしくなつてくると
私は心配になつて、わざわざ訪ねて行つたの
に

貴女は采ない理由をほつきりと
私に答えてくれなかつた
だけと、あの時
分裂の話が出たでしよう
S子、覚えてる？
貴女はその時云つた
「そんなことはないわ」と
それなのに貴女はいま
私と手を切り
私たちの組織をすて、
第二組舎に行つてしまつた

さびしがりやのS子
職場が同じだつたら
こんなことにはならなかつたかも知れない
だけと
なせなのS子 S子
私は大声で
女学生の時のように
S子とつもつ一度睥でみたい
帰さないS子よ
八月三十一日

空色の自転車
長谷 照男
今口も口産街道を全通の兄弟が
空色の自転車を飛ばせてやつて来る
総評や空軍雇や地評の兄弟たちの

同志のちかいかをもつてやつてくる
「サイゴメデガンバレ トモニタカカウ」
「キヨウトウヲチカウ」
「ニツサンノキヨウタイガンバレ」
「タカカイヨゼンメンテキニシジス」
ひつきりなしに空色の自転車が
焼けつくような夏の街道を走らせて来る。

ある 討議

藤田 弘輝

「まかさされてもいゝではないか
かたられてもいゝのではないか
どうせ人間は永久に「まかさされはしないんだ
我々の愛は不滅なんだ
同じ日本人が、いま、素つ裸で
自然の暴君の行跡と斗つている
男も女も子供も大人も
助けてやるつよ
俺たちの出来をいゝは
屋根までもつた泥を運ぶ自転車を
水害対策といつて自転車を
急いで造つてやることなのだ
斗争中だが、このときばかりは
にっこり笑つてほこをおごつ
そしてから憎しみの刃をふり上げよう
民族の名の下に斗つていゝ
貧しい人々よ
持つものは人間愛以外に何も無い人々よ
君の持つ人間愛のみが世の中すべてをばな
いださるか
そこに勝利の道のあることを信じていゝ
(六十台の自転車を水害地に出荷する討議)
七月七日

俺たちの眼を見ろ

宮 順一郎

そつくりそのまゝ水害地に送つたら
どんなにか貧しい人たちが救われよう
近頃の安齋請にはちよつと見られない四寸角
杉の正角を一尺五寸おきに建て連ね
同じ四寸角のつよつよ

おまけに有刺鉄線を縦横に張り巡らし
そいつがえんえんと五万坪の工場を取りま
い
しごめ

とてつもなく豪勢なハリケーン
その中には

一晝夜二食分

ピース二箱、酒も出て、田五斗

近頃飛びつきり上等の仕事にありついた日雇者

柵は丈夫だ、日雇者の護衛も充分

それで

かれこれひと月も太陽の目をみない、何より

も太陽のぬくもりが蒸くなくなったとこののが

囚人色の作業服を着た部課長者の姿も見えない

だが、おい、

友よ

俺たちのやせ腕では小ゆさぎもこなない立派な

柵

若くたくましく護衛に守られた部課長者の

眼の色をみたまへよ。

おやおと力なへ

木偶の坊ついにいもおいもなへ

勿論敵を憎み、斗いぬくなるとファイブは

すでに海葬してへこ

泥のよつに生氣のなご眼の色

物がけでなげねば下りられなご眼の色

それがかつて俺たち仲間を売り、ふんぜん

脱退してつた者の眼だつこののが

経理者をたまひし

俺たちを騙して追つておひ

俺たちの職場を地下足袋の跡で汚してめたも

のへ眼だつこののが

おやおひ

影の如き眼の色はどはなごか

うじま

俺たちの眼を見よおひ

部課長者よ

物がけでしか見せねなごつこのたり

豪勢なハリケーンのみきから盗み見よ。

俺たちの三ヶ月にもなる斗いだが

しかも、カマカマと腹の底から笑えるこの明

るい眼の色を見よ。

そこそこ米を賣つのにひと昔苦する友は居て

も

病人をかゝえてクスリ代に困る友がいても

何と

俺たちの頭上にひるがる夏の空

ひるかえる全首の赤旗のよつこ

熱気を帯び

やがて来る勝利の日を信じてつたがいない

者の眼の色を見よ。

不当検査

その目を忘れなご

和加 太平

忘れるものか

その日八月七日夕刻

検査と私服と

武装警官二百人

検査された日

斗いのさなかに

すべての人が

平和的にと希つ時に

それを断ち切り

ゆく手に

暗い黒雲を立たしめた日

それが法といつのが

それが民主主義を唱へ

愛社心を叫ぶ良心なのが

「ロツキと人夫に守られ

部課長にかしづかれ

独裁をぶるつ

工場長の返答なのが

法の名に於て

不法をする者

その者の正体を

鉄甲とベストは語り

逮捕状と

味つたことのない

不気味な冷たい手錠は

そのからくりを語る

みんなの益哲を返せ 秋鞆を返せ

みんなの書記長を

みんなの手に返せ

みんなの手に 返せ 返せ

にえ返る腸を

「にくしみのあるつば」にぶちまけ

つたえ つたえ

鉄窓をゆるがすまで

立てこもる部課長の

汚い胆^{はたけ}つ玉を ちびみ上げさせるまで

つたい続けよ

七千人の手に返るまで

とらわれた友よ

新井 住雄

とらわれた友よ

二人の友よ

職場の芸術家たちよ

O君

君は工場の絵描き

S君

君は工場の詩人

二人とも僕のよい友達だ

二人の友よ

君たちはいま

むし暑い夏の

あの せまじくもじく留置場の中で

その眼を輝かせ

そのこぶしをかたく握り

今日も潮風にはためく赤旗の下で

高らかにひびいてくる

インターナショナルの歌声を感じているだろう

とらわれた友よ

二人の友よ

もつししの辛抱だ

歌声と赤旗の波の中に
君たちを迎えに行くぞ

俺たちはこゝを動かない

浜賀 知彦

風がいくらかある

死んだよつな中区の一角

八月の太陽の照り返入す

加賀町署の石段に

俺たちは怒りに燃えて坐り込んでいる

すぐ前は水上署だ

五分もかゝらない所に

地方検察庁や地方裁判所がある

家庭裁判所もある

商工会議所もある

その回つの方に横浜の港がある

それらをあやつる黒い影よ

手錠をかけられた男が

焼けた鋪道を力なく往き来している

この街は権力の街

この街は金力の街

いま 俺たちは石段に腰を下したり

二つの警署に抗議したり

裁判所に行つたりして

同志の釈放のために

この街は権力の街

死んだ様な中区の一角

俺たちはこゝを動かない

怒り

藤田 弘輝

益田組合員検束

益哲がとつつかまつた

加賀町署指令第一号

Z旗が夏の陽に輝く

益哲の一人や二人かなんだ

益替は未だいるんだ
よせやい組員は七千人居るんだ
よせやい組員七千の一人一人が検束できる
世紀のナンセンスにしてやろつ
益田組員長検束事件
七千のいかりを忘れんな
七千の力を忘れんな

釈放の日

香取 悠美

Ｔさんが帰つて来た
フタ箱に監禁されていたＴさんが
和氣溢れる組合事務所のある午盾
誰かがすつとときよつな声で
“Ｔさん帰つて来た”とこび出した
それ迄口角泡で討議していた人
ガリ切りの人 お金数えていた人
一瞬みんな立ち上つて
入口にこゝんで行く
“御苦労さんくくく”
拍手の中
少しばかり衰弱したＴさんが
それでも元気一杯
“お世話になりました”と叫ぶ
みんながソロ／＼とＴさんに繞り取り囲む
その胸に卑怯な会社への怒りが憎しみが
充満して 渦巻いて
その姿全体が斗志の魂に見える
Ｔさんの帰りと 迎える人々の喜びを
Ｔさんの加つた明日からの斗争のためにも
何だか嬉しくてく
私はどこにも居て良いかわからな
お茶の道具を持って たゞウロ／＼
嬉しくくととびはねて居た

有刺鉄線

立入禁止

春野 一郎

そこで わかもの足はとめられた
工場内に四寸角材が組まれ
工場内にバラ線が張られた
鉢巻をした人夫がバラ線の前で待機している
スリッカーが ガンガンびくいている
その前で 若ものたちは立ちどまり
憎しみと怒りを燃え立たせた
「立入禁止」「立入禁止」「立入禁止」
ベニヤ板に書かれた文字をじつと見つめてい
た。

はらの底から はらわたをあつくした
日本中に異国があり
至るところに立入禁止の立札があり
日産にも立てられた。

憎しみと怒りが炎のように燃え上つた
棒抗やバラ線ではこまかされない
「あぐまで斗つんだー」
「あぐまで斗つんだー」
わかものはスクラムを組んだ
いつまでも

わかもの胸の中に
憎しみと怒りが炎のように燃え上つた

(八月二十日 工場閉鎖の朝)

煙をほかない

宮 順一郎

幾日も煙をほかない
煙をほかない煙をなんてまるでカイヤイだ
くつきり截つた煙突の直線
夏の空はげれないあおや
汚れない空の色なごて
京浜工場地帯にふさわしくない風景だ
ドロップハンマーのひびきも
千余台のモーターの底捻りもない
すさまじい労働が火花を散らす工場地帯の
二つのみは
しんとしたエアポケット
みんなふさわしくないものばかりだ。
工場に雨が降れば濡れるにまかせ

機械が錆びれば錆びるにまかせ
ほごりがつもつても払い手がない
便所がつまつて臭気を放ち

机上の靴跡に泥だらけの靴跡が重なられ

工場が閉鎖されてもひびく月になぬ

有刺鉄線

北 典夫

三千八度だ

水だ キャンデーだと云っていたのも

きのこのごち きまづは糖雨が一日中けぶり

セーター姿もちほろびている

あの きらつく太陽の下では

僕の意識は思いきり燃えあがつた

もじすべ九月

糖雨は夕ぐれインコートを叩いてすきもの

移り变りの激しい今年の天気

知らぬ間に僕を置き去りにしたのが

意識はまだ 奥深く燃えつづける

炎のなかのイメージが 白紙の上に焼けつくとき

又しても幾行かの抵抗線を引いてゆく

熱いほど開らかれた眼孔に

僕の糧を絶つていった

有刺鉄線がどつかく拡がっている

僕のふるえをよめて

至るところ有刺鉄線がはりめぐらしてある

二町も 三町も

山の間を縫い畠の間を縫って

しかし なかに納まっているものは

栗のいがが割れるころ 澄み切った秋空に美しく

幾つも幾つも はにかみながら顔を出す

つやつやと輝くリンゴだ

穢れを知らぬリンゴのために

有刺鉄線がナイターとなつて

穢れた心で近づくと 醜い手をほらこおす

だが いま 僕の眼孔にせまらつてゐる

がんじがらめの有刺鉄線は

美しい心を締めだしてしまつた

なかには穢れた心の動物が

濁つた眼もまぶしげにころころ横たわっている

太陽の子

藤田 弘輝

俺の最も愛し 俺の最も尊ぶ職場が

無精なるバラ線でかこまれた時

社長の名の大安売りがあつた時

紫外線は皮膚をそめ

紫外線は皮膚をむき

紫外線はじりりと骨をやいた

一日 二日 四日

俺は笑つた

俺は大自然の洗礼を受けたのだ

俺は太陽の子だ

憎しみの子だ

俺は笑つた

俺の心はこんなカスガイやバラ線に

しばられるものではない

俺の心を知っているのは隔離された棟の隅

で

小指の中で待っている工具だけだ

俺は笑つた

きつて俺の手で職場閉鎖をよこしてみろ

俺は笑つた

何もこわいものはないんだ

俺は太陽の子なんだ

有刺鉄線 圧迫の歴史

宮 順一郎

何十町歩 何百町歩 何千町歩

日本中至るところが有刺鉄線で囲まれた。

日本中至るところに

「日本人、すべからず」の立札がかけられた

日本人が日本の町を歩いただけで半殺しの目

にあつた

そんな噂は珍らしいニュースではなかつた。

はり巡らされた有刺鉄線の中は

停電つゞきの夜でもおぼおぼと灯つていた。

クリーム煮える匂いがたぎよい

肥満した赤ら顔が支配していた

彼等は戦勝国という名のもとに、有刺鉄線の

輪をひろげた。

兵舎が建てられ、倉庫が建てられ、

射撃場、演習地が定められた。

彼等のために家を、土地を、生活を奪われた

人たちが

りくそくと跡を断たなかつた。

鎗旗を押し立て、断食を続け、坐り込みを行い

嘆願し、反対し、凡ゆる闘いを巻きおこした

が

有刺鉄線は

無表情な沈黙を続け

その中にすると、口をきかぬまま

トラクターのような強引な力でその輪をひろげ

た。

かつて

朕が命にそむくべからずと言われたような

絶対の権力が

有刺鉄線の囲いの中から放射された。

日本人であるが為に、生きる喜びを奪われ、

きよ大な圧迫の下で

ひじまのよつなつめきをあげて生きなばな

らなかつた。

有刺鉄線

それは人間性冒涇の歴史の中でもある

一九五三年八月二十日

有刺鉄線は

ついに俺たちの職場に張りめぐらされた

一尺五寸間に建つけられた四寸角

延々と一場の果から果に延びたバリケード

天皇の御名で戦勝国の名におまかえられた

経営者の圧迫

彼等が張った有刺鉄線は

俺たちの生きる権利と働く権利のびを奪おう

とつた。

内灘の漁民たちが

沖繩の農民たちが

長い間いためつけられた日本中の怒りの固り

たちが

くるしみつづけた労働者よ

俺たち七千の火の玉は

御身らのいかりをしつかりと背負い

今あらたな激しい類を紅潮をばて

フアンシヨの化身、有刺鉄線のいまわしい歴

史に

不動のピリヤドを打つことしている

団 結

宝野二番地へ

浜賢 知彦

国電新子安の駅から十五分

枯かけたフラタナスの歩道を

こぶしを握り、脚を速めて

たてよこの運河にかこまれた一角

横浜市神奈川区宝野二番地へいそいで歩く

そこには俺たちの職場がある

悪らつな

バラ線を張りめぐらして、角材を押し立て

門を閉ざした工場がある

あの本館には人夫やサラシを胸に巻いた

くりからもんまんの男たちが

部長や課長と一緒にてんをまわっている

しかし俺たちは何とも思やしない

今日も堂々と自分の職場に入つてゆくのだ

油によくれた作業服に着更へるのだ

あの閉ざされた門の前には

働く兄弟たちの組立旗が立ち並んでいる

大きいのもあれば

小さいのもある

新しいのもあれば

色あせたのもある

あんなの赤い旗の中には

くじけよへの歴史がかかっている

あらゆる弾圧に打ちつて来た

働く同志の姿がしみじみしている
仲間たちよ

この真夏の太陽の下で
夕風にはためく赤旗をあはれ
この旗の下にうちかがおつ
それ握手だ

離すな

明るく世の中の来るのを信じて進もうぜ

最後 まで

山田 武治

いのちをかけたこの斗争
われくは最後までぶつ
数百の武闘宣言「うちこも
われく」の団結は固く

ロタリーにひるがへる組合旗
労働歌「憎しみのこぼ

生活は苦しくとも
われくは最後までぶつ
スクラムを組んで
いのちをかけたこの斗争を

八月二十六日朝

高峰 美大

雨だ
雨が降っている
八月だとうまのこひやりとす
雨が降っている

鋼材倉庫の中で開かれた
今朝の報告大会が終る
それなのに誰も動かない
ぬれた傘をもつて立っている
遠くの方でも叫んでいる
徹夜防衛の連中も
赤い眼を無理に開いて
急場作りの演壇を脱んでいる
この大会で

俺たちは何を見たか！

仲間を裏切った七十五人の係長の態度だ
俺たちは何を聴いたか！

会社の操業を奪うこと
係長たちの声明書だ

見たぞ そのあわれな姿を

見たぞ そのひくつな眼を

きいたか そのいつわりの言葉を

組合員はマイクの支柱を握って

叫ぶ

仲間よ歌おつ「にくしみのこぼ

彼は涙を「うたえている

誰もが涙を「うたえている

彼は泣いている

誰もが泣いている

高らかな歌声は

屋根にぶつかり

四方の壁にはねつかえり

破れた窓から飛び出して

運河を渡って向岸に広がってゆく

今大会は終った

外は雨だ

雨の中で俺たちは

叫ぶ！

誓う！

このスクラムを解くな

仲間よ

このスクラムを解くな

日産 街道

香取 悠美

直射日光とほごりの日産街道を
職場を失った労働者が……続く

会社の宣伝を鵜呑みして

しきりに休むことをすすめる父母に

そからつて今日も

強引に出て来てしまつたけれど
部長と人夫のものになつてしまつた会社
今日一日どんな生活があるう。

民友系や容共派のビラが武力する道
私達の愛する職場が

今、総評と日産連の決戦場とか。

目覚めなければいけないのだ
再軍備のこと、日産の将来の方向
そつたらメンメンクヨクヨしないぞ
もつと積極的な関心と行動を
私達も持たなければいけないのだ。

それなんだ 私達の毎日の平和を守るため
この道を その日くくの仕事のプランで
期待にはすなだ歩ける平和の日が
一日も早く帰るために
私達は目覚めなければいけないのだ。

八時のサイレンが鳴つた。
誰一人走つてとほじないが
ゆく手に各地から寄せられた
赤旗がはためく
本館の屋上に双眼鏡と部長が
職場をつばわれた労働者が
今日も……続く。

僕のポケットはあたくかい

宮 順一郎

僕の心はあたくかい
ポケットがあたくかいからあたくかい
好きな煙草を切りつめ
一杯のんで疲れをいやしたい気持ちを押し
そろく米を磨つ銭が心配になつた
僕の財布には
今日のパン代しか入つていないが
この頃の
僕の心はあたくかい
ポケットがあたくかいからあたくかい
僕のポケットには

日本中の斗つている友だちの
心をこめた激励のビラがぎつしり入つている
駅から大倉場迄の日産街道で

今日のよつた激しい雨の日でも、僕たちを待
ちつけ

一枚々々配つてくれるビラが入つている。
だから

僕の心はあたくかい
ポケットがあたくかいからあたくかい

同志よ

藤田 弘輝

本心に斗つていつ秋が来た
本心に斗つていつ秋が来た

今までいよいよと築いて来た
明るい職場 職場の民主化をかけての斗いが
八年間の力を發揮する秋が

我等の努力と面目にかけての斗いが
金では買えぬ労働者の魂の斗いが
そつた

それは愛すべき人の為に
子供や孫の為に

日本とこの民族の為に
絶対に勝たねばならぬ斗いだ

派閥のみにくせや

籠城に満足するあわれな

それこそ日産をこぼす

地位にまよえるみにくせや

利己に狂えるあわれな

それこそ我等の敵

斗われ

同志よ

勇気と愛情と信頼と誓いが
心の奥からにじみ出る言葉
そして心の底からぼたのりつ
ほええみの深きこの言葉

そつた

同志よ

頑張ろつ

山は頂上になる程苦しいんだ

頑張らう

雨にも負けず

風にも負けず

工場閉鎖をけつこぼし

不当検挙にくつせす

サア

俺のこつこ腕にスクラムを組め

俺の だらけの手を握れ

前進だ

Z旗を押し立てて、前進だ

有感

主客隔絶絶交

狂態滋極反動城

憂哉企業衰運秋

回文筆東輝何人

読人不知

第二部

斗いの歌声

北 典夫

日産 街道

汐風にまじりて

今日も硫酸銅の異臭がただよびてくる

ゆたかに満溢れた

運河は まだ眠っているのか？

荷を満載したタルマ船が

船腹まで隠れるほど重く横たわっていた

朝の小波に静かにゆれ！

運河に面して燻けたスレートの棟が

朝露のなかに大きく浮かびあがつてくる

二十年の歴史をきざらねてきた

俺達の職場が！

その職場に通ずる一本の幅広い道を

俺たちは長蛇の列をなして

時間に遅れまいと歩みを早める

己の家庭の営みに

唯一の糧を搬ぶため！

かつて京浜一の低賃金工場と云われた

日産だった

いま 日産街道と呼び馴らしてきた

この道を急いでゆく数千のなかにも

戦争の重圧の下で

労働強化に耐え

低賃金に耐え抜いてきたものも

幾人かいることである！

そして八年前

始めて組紘を作り

職場に押つかぶさっていた重圧も

労働強化も 低賃金も

打ち破る日を迎えたのだった

その日から斗いは続けられ

その斗いのなかでこれの力を育て

これの進むべき道を見極め

これの生活を言々と築きあげてきたのだった

枯がへりながらも微かに生き延びてきた

プラタナスよ！

五月の空に照り映えている

日産街道よ！

お前達こそ誰よりもこのことを知っている

要 求 提 出

「じつじつと唸る機械の間から

積み重ねた素材の蔭から

洩れてくる幾百かの声があつた

或る時は淋しいよな！

或る時は哀しいよな！

或る時は怒りを念じたような声が！

ぐつと肚の中まで押え込んでいるのか

耐え切れずに洩れてくる声が！

あゝその声は俺たちの仲間から洩れてくる

あゝその声は俺の肚からも洩れてきた

いま会社は盛んに宣伝する

口産は高賃金だ

あゝその宣伝こそ合理化となつて布品敷だ、
事業は機械の陰から洩れてくる声。

臨時士でなつてはなくなつたが

毎日懐に入ってくる金はこれだけだ

この事業を何隠くそして

合理化となつて布品敷を拡げてきたのだ。

煤煙けする空の下に

きのう口産の定期大会が幕を下ろし

一九五三年の運動方針が

五月の空に響き渡つていった。

そして俺達の肚の中から洩れいでた声が

要求項目のイの二番に打出されたのだ。

あの布品敷をはねのける時がきた。

五月二十五日！

あゝ俺達は此の日を待つていた。

おい、ともた半つて行くぜ

俺達の職場から

八時 ちあひお

俺達はこの叫びと同時にスイッチを入れる

見ろ！

みんなジミツいた則垂を締め

腕まくらをして待つてゐる

そら！

みんな機械にとりかかつた

一斉に唸りはじめた

ボール盤もグラインダーも

旋盤もターレットも

俺たちの一大交響曲が始まる

仕事の歌が合唱される

素材はほとんど鋳物だ

ボール盤 ターレット 旋盤屋は

この粉末になつて飛び

切屑キリコを頭からかぶる

そのためマスクは年中掛通し
やがて駄が汗ばたでくもるころ

マスクを掛けた顔面を

この粉末がこつてりと埋めてゆく

しかし俺たちはへいちやらだ

これが商売だからネー

グラインダー屋は

でっかい砥石が回転する間

切削油インダクターのじぶきを浴びる

第一工程 二工程 三工程と

精度の出てきた製品は

規律よくコンベヤの上を流れていく

こつて仕上つた製品は

全部二ツサン車の心臓部

エンジンの部品となる

俺たちはこの仕事に誇りをもち

この機械を心から愛する

そして一日の仕事を終えると

思いきり機械を撫でてやり

御苦労なことをこのだ

この愛情はすべてに向けられる

見よ！

その食卓を！

四合壇に挿入れた一輪の花を！

俺たちが真黒い顔をつきあわせて

妻の弁当を手にするとき

仕事で緊張した気持ちをちわらけてくれるのだ

このよつな俺たちは

大量の人殺しをやる

戦争を肚の底から憎むのだ

そして平和を守るためにも

築きあげた俺たちの組織は

あくまで守り通さなければならぬ！

そして俺たちの生活も

より高く築きあげなければならぬ！

六月二十五日

連日降つつな雨が降り続き

連口烈しい職場討議がかわられた。
団交も一回二回三回と続いたが
いつも要求項目の内容に入ることなく
会社 今度はおくまごやる と言ひ
七・七提案の賞書を押しだして来た。
そして遂に組合で協議が成立しないうち
それの二方的実施を行つていた。

俺達の長と云われ！

同じ屋根の下で！

同じ組合員として！

一言でも多く！

一言でも優れた

二ツサンの車を作り出さうと！

日々ともに汗流すをわかち合ひつて来た課長！

その課長はいま組合脱退を宣言し

その掌はすでに組合活動の時間記録に

集中されていたのだ

六月二十五日！

家には妻が吾子が恋人が待つている

そしてそれらを以々と心に画がき

俺達が掌にした給料袋は

なんの通告もなく差し引かれていたのだ

課長と云われるあなたが

二のふつなごまをするとは信じられない

それから七時間にわたり

俺たち一人一人の嘆願がはじまった

俺たちはいつも裸の人間だ

俺たちは馬鹿正直で働くことが大好きだ

この俺たちが裸になつて頼んだのだ

職斗長の涙は頬を伝ひ

係長 組長も涙を流して頼んだのだ

あなたも人間として対決してくれと

そして俺達の職場をいつも明るくしなうと

あゝ遂に時計の針が十時四十五分を指した

とき

あなたは百パーセント支給するし確約して

くれた

あすからの時間記録も止めるわー！

六月二十五日

家には妻が吾子が恋人が待つている

きよつはなんの土産も買えなかつたが！

妻よ 吾子よ 恋人よ！

明日は必ず土産をもつてゆく

そして明日からも

俺達は課長を中心に

力のかぎり働いていくのだ

深夜の空は黒く

重く辺りを包んでいくが

俺の心は明るく灯がともつて来た

背信

裸になつた僕達

裸になつてもらつた課長

裸と裸の話し

僕達はそう信じた

あなたが裸になつたと……

裸と裸で話合つたと……

僕達はそう信じた

課長よあなたは

僕達をだました

僕達は裸の人間だ

僕達は仕事の歌が大好きだ

仕事の歌は

だましては聴かれない

だましては聴かれない

聴こえるか

あなたの靴音が響くと

歌が消えるのだ

リズムミカルな！

リズムミカルな！

仕事の歌が消えてゆく

なんと暗いことだろう

『六・一五団交要求された職場を断つた俺達の闘争記録』
『六・一五団交要求された職場を断つた俺達の闘争記録』

工場 閉鎖

遂にやってきました。

八月五日朝

瞬間 俺は全身が緊張に痙攣した。

足の先から頭のとつぺんまで

鋭いもので突抜かれたようだった！

門の前を仲間が群をなして

ちくちくしてー

やりやがったなー

叫びながら五社の文字を讀んでくる。

統制に当たっている職斗長や言行隊の仲間

そのきびきびした声が

俺達を構内に誘導していった。

本館の入口は固くどぞとされている。

俺はいま

その 部厚い板張りを見て

かつて褐色の制服をまとい

肉弾撞撃をやらされた時

爆薬を背負い

第四匍匐へんぷくで近づいていった。

トーチカの入口が思い浮んできた。

職場の入口も固くどぞとされている。

バラ線がぐるぐる巻つけてあった。

本館のスピーカーがさかんに吠えている。

中にもぐっているのは部課長だ。

昨日俺達に背を向け

犬のよつにもぐり込んだのだ。

組長の怒りを食んだ声。

横浜四十のくしみの歌声。

この固く結ばれたスクラムが

あの犬の遠吠をはね返した。

見よ！

いま 全真職場に入っていく

不当検査の翌朝

俺たちは職斗長の報告を待った。

職斗長のメカネが

きらりと光り

一言 口を開くと

そのまゝ唇を噛みしめた。

職斗長も

俺たちも

暫く無言のまゝ唇を噛みしめていた。

部課長のいなぐなつた

現場事務所の前

種重ねた

素材の前

俺たち二百人はしーんとなった。

職斗長が泣いていた。

やがてS堂任が

昨夜の出来ことをぼつりぼつり語り始めた。

重苦しいものが辺りを包んでいった。

そして俺の肚の中は

熱いものが沸きつてきた。

八月八日

八月九日

すでに 一ヶ月に渡る 苦汁に

懐中なつかは めつぽつ涼しくなつてきた

おきがけの煙草も灰皿から拾つた吸殻

ちいさい煙管に挿込み

床の上から煙りを吐く

八月九日朝

日曜日は 空は青く

千切れ雲が静かに流れていく

僕は萎縮した財布を覗いてみた

百円札が一枚わびしく入つていた

それからスボンの物入れや

机の引出しなどもすつかり覗いてみた
出てきた 出てきた

十円札 五百玉

しわだらけの一円札

八月九日朝 二百六十八円確認

僕の全財産だった。

買ってきた新生を一本抜くと

開放した窓際によりかかつた

日曜日だ 空は青い

千切れ雲の流れにむけて

吐いた煙りは

遂に部屋の中へもくぐつてきた

この煙草も きまじくからは

本当に 大事にすわねばならぬ

工場防衛の夜

南窓を敷いて

その日も 一丁にも 一丁にも

千余をかぞえる

俺たちの仲間が横たわっている

空には無数の星が燦めき

真夏の夜に

こころよく 涼を入れてくれるが

車の影の見えなくなつた

このロータリー広場は

いま きびしく武装した

緊張に 夜の気圧が

びんびんとほねかえつてくる

黒く ただ払い工場は

俺たちの防衛に 安堵の吐息を洩らし

二つの大きな口から

静かに 灯りを吐きだした

灯りに 映し出された

鉢巻姿の仲間たち

打倒された バリケード

そつだつてつを再び

立たせないために斗つのだ

防衛を終えてその朝

なんの変異もなく夜が明けてきた

きまじくは七千のどくしみを

思いきりたくきつけてやめ口だ

無事に守りとおせてほつとす

と急にむむくなり

職場に帰ると

そのまっロツカの上に横になつた

パイの音が ぢやぢやぢや

聴えていたが……

よきならぬ歓声と拍手に夢破られ

開らいた眼に光りがまぶしく吠え

天井の鉄骨がぼやけて見える

油のシミついた

菜ッ葉服をはねのけ辺りを見廻した

ますます激しく

拍手がまきおこつてきた

おお 大阪の兄弟だ

いま機械と機械のあいだを

進むでくる

真紅の鉢巻姿

固い 決意を語つていた

どこからともなく

歌声が流れ工場の中を拡がつていった

斗いのそなかで

白色レクホンの大群のよつた

俺たち七千の兄弟は

いま ロータリー広場を埋めつくした

真夏の陽はじりじり灼け

背はごつごつと汗がにじみ出る

いくたひか歌声がひびき渡り

数限りなく檄電が飛んでくる

議長壇の上に

真紅の旗がひるがえり

数限りなく巻起る拍手と歓声のなかで

なぜか俺の眼頭は熱くなつてきた

そひなだ
マステジがないのだ
俺たちが職場から選ひ
何時も斗いの先頭に立つてきた
六名の同志がいなのだ

八月七日漸く陽が落ちかけた頃だった
鉄がぶと こん棒部隊に襲われ
うばいまられてこつたのはー
そつこの暑わじ
あの 苦しつた種ごとらわねてゐるのだ

だが聴いてくれ
きつこの俺たち十千の叫びを
全国数百万の兄弟の叫びを
この叫びが必ずぞ
あの鉄の門を叩き
鉄の扉を開らいて見せるから
それまでの辛棒だ 待つてくれ

やがて副組長が
高く強へん斗争言葉を詠みはじめた
この時とらわれの同志
三々釈放の知らせが飛んできた
ああ 大会は沸きかえり
歓声があつてと大地をゆるがせ
炎天を突破の

誓記長を先頭に三名が姿を現わした
あゝ 斗いのさなかに
俺たちの同志が帰ってきたのだ
だが まだマステジがない
シロウハンがない
オカモトがない
よゝ俺たちは半つ
そしてまだまだ斗いは続いていく
工場闘争反対 不当検挙反対 要求貫徹
総決起大会万歳の声が
きつこの暑わじとこつた
八月十一日

第三部

組織防衛

苦しみの中から

副組長 若子

おきぬけに新聞ひるげ組合員長の検挙を知りて
はねり起き出す。

笑顔なる組合員の言葉はめ検察報する新聞紙
上へ

平常通り駅に下りせは工場闘争の口はらわれ
あつ急あつくなつ

不当なる工場闘争を語りつゝ心はせつめ朝の
通り路

原板マに閉ざされてゐる本館の釘つけたくて職
場ごぼわれ

業務命令の電報を握りかけつけ友のひきつ
るへたひきを見る

守衛のかたくなのたごつて反抗の心もおき
め職場闘争われ

業務命令にタイムカード押せば組合闘争の冷
やかな眼にたちろきもする

のぞきみし部長に入口おけるつめわれん黙
して黙田のひきをこがす

風太郎とおほき入り屋上を我物顔と寝入
り居りぬ

みじから開にこもつての課長の一夜のせし
れをあげひげに見ぬ

職場なぞ職場に一日おつて門出がはなのつれ
いしむかえをへんぬ

業務命令の電報と連達を握り我をむかえに来
つたのこゝろ

通しない電話に不安を覚えかけつけし母の姿は不断着のまゝ閉ざされし職場の外の硝子戸に顔よせ居れば部長のカメラ動きぬ

幾通もの会社の手紙読む母はまづとも顔に組合を書む

要求の正しきを説き語れども母は会社の説をきけとこいつ

毎々の食卓の皿のそまじやをいふと我が家は斗争中の家計

責本家になるんだねといふ気なくもつ友に激しき斗争の話をしつける

バスの中に一日をすしす日の続く工場閉鎖のたゞかゝの中

組組長書記長の検査に一人立つ副組組長の指示をきく入る

両翼をもぎとられして云ふと手交えたつ友好団体の力強き激励

激電の次々読まれ拍手沸く赤旗ゆらぐ大会場の中

だみ声の会社のスピーカー流れゆく期せずわき立つ仲間の歌声

我々の職場と思つに入ると会社の声にいきとあじわく

冷静に判断せよとこの城の会社の声は嘆きにきく

労資の天目山なぞ報しらるる斗いなければたゞか

いぬくのみ
天目山などになりたくないと発言あり早期解決のぞむ声あり

同じ労働者よと呼びかけみればいづこもある社

外者達の何くわめ顔
留置されたお口頭の指示つたつ組組長の意気

に胸つまり来
ランニングに下駄はききの組合長とまじく酷罵に

つかわれ出すなどひどくあざむく

ガレーチの二室に入る三十人なり立ちたるまゝに茶をすくう居る

水も出る耐え生活おこしやいひるる職場閉れわれ涙

ふとしたり

弱気ならずと云いきかせてそまじくつかいをふとのぞきみる

箸のない事に對つて書食時機の中をそつと思ひ出す

たゞみの室がふとなつかしくなる一日中バスの中に職場討議がそわび

友達の欠勤の数ふえる業務命令の保証に安心してか

組組員の自覚なるなど説いてみる欠勤の安心に甘んじぬため

インクもかれしスタンドの中ちびし鉛筆で出欠をとる

応援してと心の中に叫ぶ 共に語り合う友の一人に

本館の厚板のとれる日はいつ今日も重い気持ちで出勤する

さびついた機械ありと聞く技おこころえぬよう電話書庫を並べる

通用門も閉ざされバリケード張つた工場因団結に押切りバリケードくすれる

くすれたるバリケード踏みこえ大会場につどいゆくなり休みあけの朝

警備補助者たちにかためられた本館前いかりの心つて来たる

バスも退かされゆく所なくなつた私たち現場の隅に小さく坐る

短歌ルポルタージユ

沢藤一郎

課長 交渉

給料で喰ひ我等なり出鱈目に引かれて怒らぬを有つと思ひや

労働者が馬鹿に見えるのか出鱈目に給料を引きて恥め課長は

出鱈目に給料引かれしこの怒り押えて課長の態度みよめぬ

正しきに返す言葉はなまき課長に問われて釈明し得ず

我々と共に行動とれぬものか課長とどう地位か 一言もはびさす

工場閉鎖

団交もせず「工場閉鎖する会社の課長に怒り
わく

無類漢を多数雇いて対立する会社の態度は打
破のへし

あやまちごころつほかなきぞ無類漢を雇いて本
館にたてこもる部課長

嚴重なバリケードも我等をははみ得ず本館前
は大会となりぬ

「憎しみのるつば」を言らかにつたい勝ちぬ
く決意をわらに固めぬ

三回目のバリケードは嚴重をきわむ
ふてぶてしき暴力を見よ夜をかけてかゝる敵

重なるバリケードを築きぬ
労働者を人間らしく扱わぬ会社の態度だこの

バリケードは
あきらかな暴力だこれ嚴重なバリケードで戦
いをいどむ会社は

紛争をこころ悪化させるのみ気狂いじみた
バリケードだこれ

バリケードを築き立て中に薄塗つかつては我等
の長たりし人

組公言他幹部公名今当検査する
罪なきを罪ある如く告訴する会社のやり方は

憎めても足らぬ
紛争は解決せず「罪なきを告訴する会社をそ

らに憎みぬ
組公の圧殺以外に何かある幹部を告訴する公

社の意図は
あきらかに今当検査だあやまちく資本家側に

くみずの言葉
逃げもせぬを数回公言でかくみて検査す

一匹の幹部に
遂に釈放する

権力も全力も亦抗し得ず止しきは遂に釈放さ
れぬ

デシチ上げて告訴理由は破れさうめ釈放され
こは当然と思つ

憎しみ
青野 一郎

屋上下に群れている口雇人足に憎しみ沸かぬ勝たぬ

はならぬ

ぬか雨に濡れつゝ夜の警備する友ら尊しと思
て眺め

バリケードに憎しみの眼を放ち居り資本攻勢の
嵐に勝てつ

組公を裏切りし課長数人が居たり怒りの眼据え
つゝ歌つ

第四部

斗いの記録

附 編集後記

日産の若者たち

私達が会社に諸要求を提出したのは五月廿五日
でした。要求は「賃上」と「夏の一時金一
ヶ月分」それに「退職手当暫定切下規程の撤
廃」等を中心に「臨時追加採用」と「作業
服支給」それに「文化体育費の引上げ」など
でした。七月十六日までに十六回からの団交
を持ち交渉を行ったのです。組公は「応」「賃
上」を引上げて誠意を示したにもかかわらず
ず会社の態度は依然として全面拒否でした。

団交が決裂状態となつて以後会社は「日間の
「臨時休業」をやつたり「工場閉鎖」「組公
幹部の告訴拘留」又は「組公組織に対する分
裂活動」など、いわゆる「打つべき総ゆる手
段を打つ」と云ふ暴力的行為に出たのです。

この中であつて斗いは拡大され全面的な問
わす、あらゆる団体の応援や^{アド}激励をつけて組
織防衛の斗いを進めています。もう少し具体
的に書きます。

六月四日の第一回団交で会社は今迄の慣行を
全く無視し職場代表の参加を拒否、諸要求も
全面的に拒否しました。又線標を非組合員に
するといふ、組合活動に対しては昨年七月七日
に会社が提案した「組合活動に関する賞書」

(七) 提案を一方的に実施することを通告して来ましたが、この様な会社の出方に対して組合は低賃金の実状や制度の矛盾など各職場に於ける具体的事業をあげて会社に反省を求め、組合活動に就いては今までの慣行をお互に尊重して七ヶ月提案の協議に入るよう一方的な実施をやらない様に申入れ交渉をつづけたのです。ところが六月廿四日の第六回団交の席上会社は、「打つべきあらゆる手を打ちその中から解決の途を求めよ」といふ暴言をもち、事業上団交拒否の態度を明確にして来ましたが、これは翌日の給料支払に於いて支払額の中から「時間中の組合活動費」と称して私たちの給料袋から賃金がやたらと一方的に差引かれる事態となつて現れたのです。この一事から見ても会社は初から組合の圧殺を意図して来たことがよく分る筈です。会社は「組合活動に関する会社の措置を承認しなければ、他の諸要求の交渉をやらない」といふ通牒を来たし、しかし組合は交渉で努力し、一応一時金の会社回答を出させるまでに行つたのですが、さて会社が提案して来たのは基本給一ヶ月分と成績加給(平均一千元)をプラスするといふもので、私達が要求しているものとではひどくかけ離れたものでした。これで交渉は決裂に直向したのです。すると会社は七月十三、十四日を臨時休業にするといふ手に出ましたが、私達はこれを蹴つて全員入場し就業したのです。七月十六日に於いて十六回目の団交が持たれました。この団交で組合は「賃金要求全般について保留する」「組合活動の覚書について会社案を若干修正、仮協定をやる」等の事態解決のため最大限の譲歩提案をしたのですが、この誠意ある提案に対して会社は「引込め」「よむわらばかりの発言をして来ましたが、なにといつのほせ上つた態度でしよう、この事業は明らかに組合の組織に対する挑戦であります」。

そこで組合はやむなく一部職場の無期限部分入トを七月十七日以降指合したのです。組合

は事態收拾の努力をつづけ七月廿一日には組合の意図を明確にした五項目からなる建設的意見を質問書の形で会社に手渡しました。しかるに会社は増々野蛮性を露骨に出し、質問書を黙殺するだけでなく一部職場の閉鎖を強行し、そのみか組合員排除業分を拒否して組合を会社面から圧迫する態度に出ました。そして七月廿五日には一度ならず二度目の賃金一方的差引きを強行し、更に七月廿二日は近畿地方水害対策を口実にして組立完成車の出荷仮処分し、反動攻勢の露骨な実体を現すに至つたのです。

しかも会社は組合の団交再開申入に対して七月二日に「組合活動覚書会社案の承認諸要求中、一時金以外は会社案を承認せよ。以上を承認すれば一時金の交渉を行ふ」といふ唯組合に屈伏のみを要求する回答を出しました。実におどろいたものです。このはね上つた会社の態度振りには良識ある人間なら誰でも「カッしたくなるでせう」。

組合はこの回答に対して「双方の主張をそのまゝ団交に持込み、双方誠意をつくして交渉を行い妥結の努力をしよう。そのために双方で行つている実力行使を中止する」といふ提案を行つたのですが、会社はこの提案すら拒否しました。そこで組合は会社に反省を求め、ために八月二日部分ストを拡大し、スト以外の職場に対しては「生産態勢復帰」を指令し、一斉に生産についたのです。すると会社は腹もたつたのが八月五日早朝、横浜、鶴見、吉原の工場を有刺鉄線で閉鎖し、横浜では本館にたてこもり、内部から錠を下し部長の大半が暴力団やら入夫(新聞紙上で臨時警備補助員と書かれているもの)等と共に工廠を初めました。組合はこの不当処理に対して「工場閉鎖反対」を通告して堂々と工場に入り生産体制につきましました。

八月七日は私達といつて泣かれぬ日になりませんでした。この日の夕方、百名からの武装警官が押寄せ、益田組合長、横尾書記長、田中

全百副委員長 中野常任、斎藤常任を檢束
翌八日には岡本職場委員を檢束するの不当彈
圧を行ったのです。この前後に凶器をもつた
臨時警備補助員に切りつけられた組合員も出
ると云つて暴行があちこちで起きました。組
員は反弾圧抗議団を組織して、この不当檢束
に対して行動をはじめました。

会社は狼狽して立入禁止の仮処分を横浜地裁
に申請しました。しかし未だこの仮処分は決
定を見ない状態にあります。

八月十一日は日産分会はしまつて以来はじ
めて全日産の兄弟七十を横浜に集めて、「工場
閉鎖反対 要求貫徹 不当檢束反対総決起大
会」を開催しました。この前夜組員一千名は
徹夜で大会場を守り抜いたのです。この大会
の真最中、横尾書記長と中野、斎藤の両常任
が釈放され、インターの歌声と組員旗の中に
歸つて来ました。

会社の悪辣極まるる挙動は裁判所においても裁
定されたのです。当然な話です。

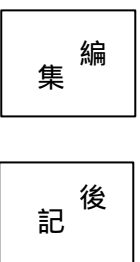
八月十八日には田中全百副委員長と岡本職場
委員が歸り、十九日の午后には益田組委員長が
保釈され、三時からの報告大会に駆けつけま
した。次々と釈放されるので会社は驚き最後
の望みをかけている閉鎖の仮処分を少しでも
有利にしようとして、廿日未明には横浜工場に木
材二百石、長さ三百米、一五、万円の金を投
じて、四寸角の木材を組みポルトで止め、
角材で横から補強しその上に三十センチの間を
おいて有刺鉄線を十重、二十重に張り巡らして
とつともない頑丈なバリケードを作り上げる
に至りました。

組合は予測していた事でもあるので直ちに鋼
材倉庫広場で大会を開き團結をかためました
その翌廿一日には血まみつた会社は組合員長
以下五名の首切りを通告して来ました。廿二
日と廿三日に渡り、「首切反対無記名投票」を
行い、その信票八八、九%で六名の不当首切
に反対して斗争事が決定されました。

八月廿日分裂派（勿論民労協、民労連、会社
のつてもつてある事はつてもあつてませぬ）

は金力と脅迫的な言語で人を集め、浅草公会
堂（社会党が分裂した処）で警察と高層炭の武
藤一派に守られて第一組合の結成を行ったの
ですが、彼等悪辣な策動にたいそをつかして
又考え直して分会への復帰を申出て来ている
者が増えつつある状況です。この仲間を売る
分裂屋とは断固斗わなければなりません。私
達の團結は不純物を除いて増々團結をかため
ています。会社は凡ゆる手を使って組合は級
分裂を策しています。例へば横浜国大の学生
から

「学生アルバイトを御存じでしょうか。日産か
ら今度組合の斗争を切崩したいからアルバイト
トに来てくれ、仕事は職場の組合員を退出す
手伝いと切崩しの宣伝隊、日当は八百円、私
共の生活はどんなアルバイトでもいなければ
ならない状況にあります。しかしこの仕事だ
けは断固はねつけました。組合員の皆さん
是非頑張つて勝つて下さい。そして私共の出
来る仕事があつたら喜んで手伝います……」
と云つて来ているのを見てもよく分かります。
以上が五月廿五日から八月廿一日までの斗
いの大略的な経過記録であります。



詩集「有刺鉄線」は私達日産の労働者に取
つて二度目の斗争詩集です。

思い起せば前の斗争詩集が出てから四年程
になります。あの時は（一九四九年秋）大
首切旋風の斗いの中で、題名も単に「斗争
詩集」とを付けられて発刊されました（二
冊発行）あの時は工場閉鎖がなかつたので
仲間への連絡もこれ、詩、短歌、俳句、ル
ポルターシユと多量の作品が寄せられたの
ですが、今度は工場が閉鎖されているので
連絡がつかなくなれず、発行が決つてから大
分時間が経過してしまつた。そのため少数の
作品しか集まらなかつた。しかし私達編集
員は一生懸命で仕事をやりました。

少しでもよい詩集を、又体裁や題名に就いても色々と意見を交し、最後に題名は「有刺鉄線」。体裁は御覧の様に小型という事になりました。

この詩集にはつまり詩はないかもしませんが、はげしい闘いの中から生れた、真摯な詩ばかりな書です。

工場防衛の徹夜の時、むしろの上で書かれた詩もあり、動員の途中、電車をまちながら歌われた作品もある。また、夕をしながらタバコ空箱に綴られた詩もある。このようにして書かれ、集められた作品ばかりです。

この詩集の発行に際し、色々の方々からあたたかい協力を頂きました。

新日本歌人協会の信天澄子さんからは多作の処わざく、「敵のパリケードは弱い」の一文を寄せられて激励して下さいました。又片山乙女さんから組合員に届けられた、「日産の労働者へ」と題し詩も巻頭にのせて皆様へ読んでいただくようにしました。

孔版は宮氏が担当しました。また結城、春野北の三氏も連日原稿集めや連絡、編集などこの仕事に協力、夜遅くまで頑張ってくれました。印刷や製本等については色々便宜をはかり御協力なされた日産社には紙幣を借ってお礼申し上げます。

私達の闘いの続く限りこの詩集は二期、三期と生れるものと見ています。この次はぜひ多く多くの仲間の仕事が集まることを期待してゆきませぬ。

最後に外部の方達が日産の闘いを応援するため、「日産の斗争をえがく会」を設け、詩集「工場防衛」を出版して下さるの事になって居ます。多分「有刺鉄線」と前後して発行されるはず、あそこかきをかきりて御知らせしておきます。(HAMA)

日産の若者たち

(この詩集のヒロークの為に)

結城 良策

お母さん

優しい優しい、お母さん。

貴女の息子、若者たちが

今日も闘っています。

働く者の生活を平穏に

新しい世界が平和になるまで

唇を噛んで、拳を固く握りしめて

今日も闘っています。

お母さん、貴女の息子、若者たちは

今日も正門にひるがえっている

赤旗をみつめながら

誰がこんなに働く者を苦しめるのかと

まなこを上上げて闘っています。

貴女の息子、若者たちが

この日産に働けることを

心から喜んでいた

優しい優しい、お母さん。

その息子、若者たちは

理由もなしに会社をほおり出されたのです。

工場閉鎖といふ

四十角の角材にはじめべらした

幾十条の有刺鉄線

その組立てられたバリケードに

愛する職場を奪われたのです

冷い雨の中に「シャーン」一枚

会社の外にはおぼろげな光です。

そして又、お母さん、貴女の息子、若者達は

つめたい手錠と汚れた逮捕状と

鉄かごとと拳銃に身を固めた武装警官が、

若者たちの指導者(春野や秋龍を)

連れ去るのを見て

涙をながして憤ったのです。

お母さんの知っているあの優しい村の

駐在さん(この武装警官)

やしほり働く人たちののです。

お母さん(おぼろげな光の)

これが日本の姿なのだ、

黙していてもこのどろどろした。

お母さん 貴女の息子 若者たちが
今必死に斗っている姿に、それでも
やめなさいといつのでしょつか。
正直な人が苦しめられ
働く人たちがこんなにつらいめにあつても
それでも仕方がない、

北 典夫
春野 一郎
宮 順一郎
藤田 弘輝
浜賀 知彦

あきらめなさいといつのでしょつか。

全日本産女会内 有刺鉄線編集委員会発行

お母さん 優しい、お母さん。

1953.9.10

息子たちは、若者たちは

組立大会を開くのため

残されたわずかな工場を防衛しようと

夜を徹するにもあきらめよう。

風に裂け、雨に汚れた赤旗にへるまつて

晴れた夜は罪を見つめて

冷たい雨の夜は物かげでこつと

雨音を聞かながい

お母さん、貴女の息子、若者たちは

徹夜で工場を守っているのです。

どんなに疲れても

それが皆の為の生活を守るために

知っているからなのです。

それでも、お母さん

やめなければいけないのでしょつか。

お母さん、貴女の息子、若者たちが

今腹の底から憤りて立ち上つたのです。

貴女の息子、若者たちの、平和な生活を

心から奪って行くのを、お母さん

その平和を乱す者、若者たちは

今日も半つこいのです。

平和な生活の、

タッ、優しい、お母さん、を囲んで

笑つて語つてお母さん、

若者たちの心は縛りたならぬ、

日産斗争詩集
有刺鉄線

発行責任者 浜賀 知彦

編集 結城 良策